へ行かうとする工合妙なり。れめに己のところへ何しにくるのだといふあたりからぐつと空つとぼけ、今時りんなまぬけがあるものかとか、自惚たことをいやあがるなとかいふあたりいかにも憎つ振なり。足駄で踏付けてゐ乍ら得意の長白あつて、とゞ眉間に創をつけ、ざまあ見やがれといひて、ぽんと傘を開き、これをかついで、橋を渡り乍らのひつこみ、御注意ほどありていかにも意氣な姿であつたり。内の場にて魚屋を呼びとめての出、湯上りの心にて、手拭を縫合せた浴衣をはふりて前で押へ、三尺を肩にかけ、楊枝を銜にさし、濕手拭にて頸を拭きながらの出、誰やらの口調に習へば、意氣といふものが衣裳を着て出て來たやうなりとでもいふべきはまり方なり。鯉一本の値をきいて、一朱ばかし瘤を出すなにとねぎる工合、腹掛から錢を出してやり、殘りは借の方へ入れてくんなと大束をきめる樣子も好し。源七が花道の出の間に石竹の鉢に水をやり、これは鉢から下した方かいゝとか何とかいふのも、穴の明かぬ御工夫といふべし。乘物町の親分と聞きて、急に慌てふためき三尺の結ひ目を後へ廻し、團扇でうこち中はたきたて、今日はどちらへ御參詣ですか、なぜ御用があるなられ人を下さいませんかといひ、暑うございますから羽織をれとんなさいと團扇であほぎ乍らべんちやらをいひてびよこ〳〵辭義をする工合、後での惡體がぐつと引立つやうこゝで馬鹿丁寧のこなし方、この道の鬼と申すべし。勝が茶を汲んでくるを見て、うんなものが親分にあげられるものか、いゝのをいれてきねにといふところも、源七がれ熊のことで來たときいて、少しづんとする氣味ありて、わつちのところの茶だつて、まさか毒をいれてあげはしませんと少し毒をいふ工合もよし。源七が己に任してくれと金包を出すを、どうも濟みませんと頂いてれいて中を改め、十兩のこの金でかにと念を押し、てえげにしやがれと敲き返すところぐつと癇の込み上げし工合凄し。何をするものか敲きけえしたのだといふ白にてきつと極り、これ十兩といふ相場はどこで立てゝ來たのだといふかゝりからぐつと前とかはつて下すんだ白廻し小氣味よく、彌太五郎源七だけから負けられねにといふ皮肉ないひ廻しも外に眞似手なし。勝や見や、いやなれぢさんだなあといつて、せゝら笑ふ意氣組天下一品の呼吸にて、これでこう默阿彌翁の文句初めて活動したりと申すべし。源七が立あがると火入をかこひし身搏も隙なく、留守をつかつてくんなとつゝこむところも惡くけれど、取分け勝が箍のゆるんだ伯父さんへといふをとめて、これ二つ名のある親分だ、失禮なことをいふもんぢやあねにと、こん度はいやに丁寧ないひ廻しで冷かす工合、また手替りの面白味なり。勝がなぜ手出しをせずに歸つたらうと聞くと、うこがやつぱり年の功だといふ工合、いかにも生利にて妙なり。鍵を探すところから烟管で錠を叩いて血豆をこしらへたといふ幕切まで、いづれも面白し。長兵衛が道入つて來たを見て無暗にごまをすつて馳走をする工合は借金の催促を恐がる樣子見え、三十兩の内裁を聽かず、上總無宿の入墨新三だとたんかをきるからいばりも、急に氣がついてあやまる工合も輕くてよし。得心するか召連訴をしやうかと嚇されて、うれちやあ負けてしまひませうと得心するところも後とつかぬためあつさりにてよく、お熊が禮をいひ居る容姿の美しさに見とれて勝と目を合せ、その儘柱によりかゝりて、あゝつまらぬえといふ心にて内懷から手を出して顎をたゝいて居る工合、捨てぬ仕打にて大得心なり。長兵衛が金はやつた筈だといふに驚き、腹掛をふるつて見するところ、夫を忘られちやあ大變だといふ可笑味も受たり。金は小判だと喜んで目の子勘定をするところから、且那こりやあちつと遠やあしませんかと幾度も勘定して見て、れりやあめんくらつちやつてどうしてもわからねえといふ工合も眞劍にて面白し。半分貰ふと聞いて抑

山に繻き、そんなものはいらねえとふてるところへ、又召連訴を嚇されて據なく承知する工合、こんど度は體がくだ〳〵になつて、着物の襟が脱げかゝりし樣子、芝居とは思はれず。おれもよつぽどふてえ氣だが大屋さんには協はねえ、これが圖ぶてえといふのだといふ白も、がつかりした調子にて大受なり。又二兩引かれてしよぐるところ、いらざあやらねえといはれて慌てゝ金の蓋になるところも可笑しく、えゝと長くれくびを出しこれでちつと留飯が下つたといふ幕切、金をほうり出し投首をし乍らつまらねねとの思入も扨目なし。殺しの場。月代の延びし假髪に半天の好み男前よく、勝に掛金を持たせてやる工合、手輕く、源七との立入に地獄がかりし形容の白、たんかの切れ方は申さうやうなく、立になりて橋の上へとん〳〵とゆき、どすを振かぶつてのきつと見得は小氣味よく、殺されまで隙なし。總じてこの役は勘五郎の方が本家ですと當人も申されしやに聞きし如く、ちと今の身上には安すぎやうかとも思ひしが、どうして〳〵ぐつとちよびに安つぽくせられて、廻り髪結を見るやうな心地し、又男振がよすぎてれ熊が惚さうにはないかとも按ぜられしが、小悪らしくいやな奴と思はるゝやうなこなし方は、流石世話物の名人といはるゝ人だけありて感服なり。

中村福助丈。大磯の虎役。果して當時の遊君はかうした拵かどうかはさてれいて、いかにも古代の遊君と見ねてよし。又さう見ゆればうれにて澤山なり。白まはしも仕打もしとやかにて結構なり。十郎と婚禮せよと云はれ、耻かしとの仕打も、只圓扇を顔にかざすだけにて、しつこからぬはうの人に適ひてよし。馴染の初めよりかうした別は覺悟をして居たりとの物語も、確に情を解するほどの人を泣かするに足り、これで後尼法師となりて、夫の菩提を弔ふ節婦と受取れたり。判官義經役。揚幕より出られし折の美しさ類なし。判官御手を取り玉ひと云ふ件も主從の情合うつり、今の所にてこゝをゆく役者は外になし。白子屋れ熊役。町家の娘で色男を拵ふる役ゆゑもう少しは仇つぽい所があつてもよし。忠七に泣き付くあたりより黄八丈に着附が變つての出まで申分なし。新三内のやつれ姿も一しほ容貌を上げたり。

市川米藏丈。手越の少將役。着附や髪の飾が赤いだけに福助丈に較べて餘程今樣に見受けたり。婚禮の耻かしがり樣も遊君にしてはちつと素人くさく思はれたり。御所の五郎丸役。この丈には無理な役廻りゆゑ、闘子のかんばしりなど受けかねたり。

坂東秀調丈。巴御前役。押出しが肉のない人故、名代の勇婦とは受取れず。白まはしなど力を入れて言廻され、大層きつさうにりきんではゐらるれど、一向に力味ばねせず。諸士の立騒ぐのを制する所も、筋のためとは云ひながら、當込が見ねすいてへんなりき。萬江役。故人坂彦はよくしてゐられたりときゝしが、名にれふ兄弟の頭を押へて、工藤を計らうといふほどの人物ゆゑ、差詰め堀越に持込む筈を、都合ありてこの丈に廻しゝよし。丈もどこか堀越をはつて仕て居られしやうに見受しが、さて重味と云ふものは器用ばかりでゆくものでなく、總體に幅のなきがら故映り悪く、一番目中の見せ場の一番目中のだれ場となりしは御氣の毒なり。兄弟の異見も闘子のとまりのはつきりせぬため應へ薄く、小次郎を見送りての出に、すらりとした姿でよろ〳〵しての歩きつき、兩手をぶらりと下げたる形は、どうやら柳の精とでもいひさうなり。襠裲を着ての出は餘程見直し、虎少將を打擲すると云ふ筋を改められたるもよく、只二人を勵ますだけの白も力が這入りてよし。二人を左右に引付けてちよぼに乘りてのこなし、見物は大分泣いたれど、形はやはり今一と息なり。

市川升若丈。榛澤妻役。初手愁にしゴみての出は相當ならんが、二の宮が悶着の間只うつむいてゐ

らるゝ形、仕草がないにしてもあまりの不恰好なり。巴が由良の助じみたる丈、この丈は九太夫の坐睡じみたり。源七女房役。この丈だけ大坂訛がとれ切れぬゆゑ大屏けなす人もあれど、さして惡落のくることもなく、女振も至極相應したり。

尾上菜三郎丈。喜瀬川の龜蔦役。すつきりとした姿は此丈のものにて、女舞鶴と云ふ格で兄弟を宥むる白も大分落附が出たり。狩屋にて手引の折の白まはしが古代なだけ、何々であらずかしといふやうなる白、口真似のやうにきこゆるは殘念なり。どうか白に餘情あるやう言廻はされたし。下女お蔦役は白粉つ氣なし、色氣なしで、そして男ずきのする女振、いかにもよし。忠七とお熊とに話をさせて、粋を通して這入るあたりも巧者に出來、使先にての獨白も主思ひの樣見え、勝奴をつきまはすうつけなさ、うんなら今のはとのこなしある幕切まで、この役は樂にして居て、大出來にてあつたり。

市川女寅丈。内命を受けての出といふ心かしらねど大屏てきぱきして、束髪女學生と云ふ風あり。二の宮も避易するなるべし。

市川團十郎丈。工藤左衛門祐經役。道服の拵が羽織を裏返しにしたやうな澁い好みゆゑ、いろ〳〵の說もあれど、惣髪の好みも品よく、顔立もどことなく一と癖ありげに見ゆ、一藪別當にて佞奸の人物とは確に見受たり。殊更いつもの道樂をやめにして髯をつけられぬは大助かりなり。高燕老人は工藤は固京家に出入し、文事に嫻ひし人物にて、右幕下の氣に入りしも幇間らしきところありしためなり、さればこの役なども今少し文弱に見する樣派手な作りにしたらばよからんといはれたり。いかさまりの方が芝居としても見榮あるべし。全體會醫山の工藤はよほど懦弱な人物にて、この場にても兄弟を見てれのゝきれり此年ら、老母の病を聞いてこれ幸と一寸逃れを云ふやうな作意なりしをゞこんどは對面の工藤をはつたところもあり、殊更この丈が菊左の兄弟を向へ廻して勤められたるこゝゆゑ、人物も餘程重く作られ一かどの奸雄となりたるため、一番目中の見せ場となりたり。周の文王は云々より鬼王が弟團三を得たりとの白は、この丈の氣に入りさうな文句にて立派に聞ゆたり。兄弟が老母の大病と聞き當惑の體を見て、老母の大病さうな氣遣ひ、一家のよしみ祐經も人事には存じ申さぬどすゞに切り込んでくる工合隙なく、どこか空親切らしく見ゆて受けたり。わが云ふことをよつく聞かれよとの白にてぴたりときまり、何故あつて和殿等が父の河津をうつべきやとかゝ何を以て何を證據にとか重ねかけて言譯する辯說いかにも巧者なり。團三の詫に兄弟の勇氣挫けしを見て取り、さもしげに言譯はいたさぬ、此場において太刀打せんが云々と打たれぬやうに理ゞめにする言廻し、お爲ごかしの腹見白て憎く、こゝは新三が忠七をたつる件とおなじゆき方なれど、見物が夫れほどにかつてくれぬは妙なものなり。和殿等が孝心祐經殆感じ入ると云ふところもしめたと云ふ腹見白透きて、本街道は餘程のみちのり云々と云ひかけて、ちよと思入あつて、むゝと扇子にて膝を突き、幸ひ祐經が秘藏の逸物云々と云ひて馬を餞するところ、この一呼吸の間にて兩人を懲さんと思付きし腹を聞かするところは、げに菊五郎丈がたゝへし如く、この丈が一手捌の妙處といふべし。他日面會にて木の頭、致すでござらうとの幕切、引張の見白はよい心持なり。勘進帳武藏坊辯慶役。れ家物十八番の中にても第一に据ゑ置かれ、天覽を辱うしたるほどの天狗物なれば、彼此云ふべき處なし。唯此丈も最早老體の事と云ひ、此程より氣管を痛め居られ、調子を餘程いとはるゝやうに見白たり。又白を勝手に變更せらるゝ爲か、往々聞づらいことあるは申

外を初め。（明治二十六年五月）[illegible]

歌舞伎座今度の興行は[illegible]

[illegible]時代物陳列舞臺ハ愛宕連歌誓文臺、新七つ面

[illegible]を銘々大肌脱の芝居を見て見せられたるは、安生堂産院の慈善にも優つた功德と申すべし。聞けば團十郎丈も新作は骨ばかり折れて御見物が嬉しがらず、時代物は眼をむくだけでわつと受けて下さるから、もう新作はだめだと大い息をつかれたとやら。新作全體がだめだといふのは太早計なれど、太田道灌や大久保彦左衛門のやうな新作を骨を折つてやらうよりは、古脚本の面白いものを繰返してやる方が當人は勿論見物も大助かりなり。[illegible]

横山家形の場は所用ありて見落したるが、現に角猿之助丈の横山太郎役、阿房の内は吾妻座で見た大藏卿の格で手輕くこなされ、歌女之丞丈の淺香役、宿場女郎の肌合も見せず、しつとりとやつてのけられたるもたゞ存ず。[illegible]

頓兵衛内の場。兒福丈の義案役。福助丈の磨色をつかつてござるだけなり。團次郎丈のうなて役。[illegible]役の調子がまだ抜けず。市藏丈の頓兵衛役。顔の作り萬端お仕着せ通りにて、金儲の話もかなり大手に出來、ぬつと出でたる主の頓兵衛の出も立派、人形身などにならずに忍び込むところもまづ相通ず。[illegible]殊更娘の意見を聞かず、邪慳なる仕打飲り好く、大分よい見にもあつたれど、待つて居りし割には今一歩意の誠ありや。新藏丈の六藏役。前々の例にて御馳走に勧められたれど、どうもなすぐつたいとなるありて受けられず。しかも新藏座の團升丈に較ぶれば遜によし。團七丈の屋八役。[illegible]の大坂八藏をさせぬかと思ふほどに出來て、すつかり新藏丈がくはれてしまひしも是非なしや。納升丈のお舟役。四年振の御目見にハ、吾妻座で朝雅丸を見せてわれ等に後世畏るべしと舌を巻かせたる源平丈とは見違ふるほどの御成人にて、十年前に高賀丈が新富座で勤められた樣かと丸度の出し物、美しき中に才はぢけたるとりなし、身上にはまりて大當であつたり。義案と顔見合せ[illegible]なしませいで何を致しませうといふところの色氣充分にてざわつかせたり。うてなを見丈の情氣から妹であらうと推量する件、口説から溺、又六藏をのせかくる言廻しまで、極器用にこ惚されたるが、慾には今少しぼいやりとしたれぼと娘の情合がほしかつたり。手を負うてからも大車輪の働にて、意見がゝ太鼓の件まで少しも氣のゆるみなく、樂にやつて見せたるは實に大した腕前にて感服〳〵。しかし向後の御注意は除り小手の利くに任せて、藝を應揚にすることを忘れぬやう心掛るべしとなるべし。[illegible]

喜内住家の場。市藏丈の喜内役。病中の拵中分なく、いざり乍ら戸口に道寄り、刀を杖にしつと重太郎の樣子を伺居る樣子もよく、子を刺殺したを見て出來したと聲をかけ、行くを呼留め、重太郎の手をとつて引上げ、本心を明す件、新藏丈と呼吸合つて、息もつけぬほど好し。新藏丈の重太郎役。人品は欲り好けれど、母や妻につれなく當る件より門口で子供をつき付けらるゝまでは側の流義で何にもせず、白に力がはいり過ぎて聞苦しいだけなりしが、子供をかせの愁歎から大分身が道丸り傍聚に恥じめられて焦立つ氣組充分にて、思ひ切つて子を刺殺し、驅往かんとして父に呼ばれ、はつと平伏したまゝ手を取られて引上げられ、と、本心を明すまで、せつない心持を得心のゆくやう演じたるは流石なり。これで高慢氣がなかつたら尚よかちう。團七丈の竹森役。申分なし。鶴谷丈の喜内妻役。身上にしてはあんなものか。女寅丈のおりゑ役。三つ四つの重箱をといふちよ

ぼに合じての振も苦もなくできぬ。初の中はこの丈一人芝居をして見せられ嬉しかつたり。兒福丈の浮橋役。綺麗ではあつたれど、例の調子で舞臺を讀まれたには閉口したり。田津丈の太市役。疳癪子ちしき聲を出すといふ人あり。

蘆湯稻荷の場。福助丈のお月役。橫濱で出された重の井が大層よかつたと聞きしゆゑ、定めしみつしり聽やうと思つたわりには堪能せぬところあり。さうして義太夫物は人形に合して拵へたものゆゑ、ちよぼに合じて充分動いて見せでは情合映らず。悲しいところも悲しくなくなるはいふまでもなし。ところがこの丈は堀越信仰の人ゆゑ、大抵なところは思入で立て切り、內端に〳〵と心掛けらるゝためか、どうも舞臺が寂しくなり勝にて、重ねかけての愁歎には調子が一つゆゑくどくなる心地するは殘念なり。しかし容貌や拵は例の高等づくめにて勿體なく、お鶴を我子と知つて愁を隱す仕打も流石に上品に出來、また一度顏をと引寄せての件には大分芝居をせられて有難く、跡を見送りてべつたりとなりて、狂氣半ば〳〵はの文句をいひ、跡につかくる件に柄杓で水を一口飲むのも尤にて、息せきとの引込みまで、二三の人の大不評の割にはわれ等は受けたり。梶太郎丈の妙貞役。顏を出さるゝとわつといふほどの人氣にて、身の上咄から辨當をくふ可笑味ぬくるほど好し。市藏丈の妙林役。これも後生願ひの隱居連にある柄にて、仮を喉に支へさするところ、自分も菓子をお鶴にやるからといひて、妙貞の菓子を一つ貰ひ、半分お鶴にやりて半分自分もくふところなども生地の滑稽にて、愁歎をこはすといふ人があるかもしれねど、われ等は大受〳〵。荔枝丈のお鶴役。まだされといふ役のついたのは一度か二度かと思はるゝのに、少しも危なげなく、人の櫓の下へ寐ては敵かれたりといふ振も大分場馴れ、お月に縋りついて泣く形も愛らしく、花道にかゝり笠と杖をとり直しての引込までよく出來され、この場はこの丈のこの役で泣かせたりとの評あるはお手柄なり。

本能寺の場。新藏丈の信長役。いつもの小田春永にならぬ樣との御見識か、性懲もなく活歷史がつて髯などをつけ、白に馬鹿に力を入れて重々しくいはるるため、思慮分別があり過ぎて、一徹短慮の御大將とは見ねず。されば隨分つゝこんではこなされたれど、本文の趣意にも、この場の釣合にも協はぬやうにて不評なり。團十郎丈の光秀役。呼出しになりて、揚幕の內にてはあゝと答へ、中腰になり、大小を妹に抱へさせての出、ねんで假髮にて青髯を薄く作られ、額に鐵扇で破られし迹をつけ、拵は白の重ねに紫の着附、上下も同樣紫にて、これに金縫の桔梗の紋ある好み、これは幸四郎も海老藏もかうせられたとやらにて、市川流の拵のよし、一さもあるべく思はれて大立派なり。花道中程にて舞臺に向ひて斜に平伏し、御機嫌伺より御免のお禮までを、例の名調子を一杯に張つて、ゆる〳〵との言廻しは、他人に眞似のできぬお家の株なり。烏の塒を燒かれし心地、しいゝんたい度を失ひし折柄のあたり尤難有し。信長に難有いか、辱ないかといはれ、はあ、はつと恐入つて、次第に體を下ぐるところも好し。一同にお進みなされいといはれ、はつと立上り、兩手にて椅の前を押へ、兩足をぢり〳〵と左右へ開き、中腰になりて屹と極まると、どん〳〵と大太鼓を打込むところの形は芝居好の涎と申すところならん。舞臺に來り斜に平伏し、盃を下さると聞きて頂を上げ、馬盥を眺め不審の思入ありて、この器をお盃とはと尋ね、その方の望に任せ云々といはれ、君況れども臣々たちぬこの光秀との白ありて、謹んで飲干す露惡びれぬこなし、范雎の引事を聞きて、君臣の道に於いて恨に存ずるいはれなしとの殊勝なる言廻し、始終信長の難題を柳に受け、一

向中國の後詰を願ふ心入大得心なり。秀吉の指揮に從へといはれ、すりや秀吉の下知に從ひと少し氣色ばみ、馬に鑾へて轡を投與へらるゝ件に、かく迄申しても、心解けざる御大將との白ありて、轡を内懷に納め、じつとの思入も應へたり。蘭丸が所領を望む件にて、信長に慥か其方の領地ちやなといはれ、御意にござりまするとの不承〳〵な言廻し、信長に他家の領地はなう光秀といはれ、天下は天下云々の白ありて、憚ながらこの光秀、存ぜぬやうにござりまするとかすれたやうな言廻し、いつれも人物に適ひて凄し。淺山が日吉丸を拜領するを見て、己が懇望せし及なることを遮へ、お羨ましう存じまするとの快からぬ言廻しも好し。拜領の箱の蓋を取りて切髪を見、合點の行かぬ思入あり、髪があるかといはれ、又思案をして右手に蓋を持ちしまゝ正面の方を見廻し、屹と心附きし仕打にて、件の蓋にて箱の端をとんと叩き、信長と顔見合はしての氣味合ありて、蓋を取直して下へつき、上に兩手を重ねしまゝ、じつと切髪を見詰むる無念の相も震ひつく程よし。この切髪は越路にて、光秀流浪のうの砌との昔語きつぱりして、烟も細き朝夕のより儘なる價にかへまでいひかけて氣を替へ、かたりと箱の蓋をして三寶をつき出し、慥に落手仕ると平伏するまで、胸をさすつての仕打得心したり。一同這入りし跡にて、桔梗を次へ追立て、靜に大小を挿し、箱を右の脇に抱へ、うつ向勝に花道にかゝり、附際に留まりて跡を振返り、さて正面を向きて、屹との思入にて、謀反の腹を極むる心持を利かせ、箱を左の脇に抱へ直して、右手にて箱の端をぽんと叩き、揚幕を見込んでぐつと大見にあり。これにて木が這入り、　幕を引くと一所に向へ這入らるゝまで、無類飛切の面白さなり。さうじてこの丈は英雄、豪傑、忠臣、義士といふやうなものが好物にて、毎度出さるれど、謀反人の國崩しのといふ風の者はやつぱり三河屋などの方が本職であらうと思ひしは

素人の量見にて、やる氣になれば何でも出來るとはいへ、見るから謀反人の相好顯はれて、何むなく場が殺氣を帶ぶるほどの凄味は又格別なり。三河屋も凄味は充分なれど、品格の段になると、此丈の方が遙か上にあり。信長の御前に伺候して居る間も、始終上眼にて信長の擧動に心をつけて、少しも油斷なき取成、充分腹に一物ある人と受取れて唯々恐入るの外なし。染五郎丈の蘭丸役。こゝでは見せ場がないとはいふ條、どうやら菊人形の桃太郎じみて、應へかねたり。訥升丈の桔梗役。れ目見白の口上でもあるかと思ひしに、さうでもなかつたれど、始終役に氣を入れて居られしは感心。その外の衆の評は預りとすべし。

光秀旅館の場。團十郎丈の光秀役。早足に歸り來り、後詰の願の協はぬことを告げ、安田に軍兵を殘らず國へ返せと表向にいひ付け、次に傍に呼びて耳打をなし、安田が氣組むをこれと押へて急がせやり、左右を遠ざけて妻に切髪を見せ、これより割白の述懷はみつしりと應へ、取分け留めての後の後悔はのあたり、今日の耻辱もこの黑髪、この身の爲には恩あり仇あり、わが胸中推拭いたせのあたり尤も好し。紹巴が次の間より出づるに目を附け、謀反を勸むるを二重より突落して一刀に切下げ、死骸を取片付さするところも大舞臺なり。上使れ入りと聞きて近習を呼びて耳打をなし、二重に下りて出迎ふる件にて燈消ゆ。こゝは所も愛宕山の白ありて、この中に仕度をなさんと近習を呼び、盤をたゝいて自身の場所を知らせ、腹切刀を据ゑし三寶を探ぐるあたりいふ迄もなけれど難有し。上着を脱ぎて、白無垢、無紋の上下になるところ、趣向も好けれど、この丈の凄味がうれに加はりて身の毛が立つほどなり。燈を取寄せ、上使の驚くを見て、諚意の先を越し、讀上ぐるを聞きて、かぐまでに惡ませ玉ふもと、少し息込みて氣を替へ、日吉丸にて介錯せられしと願み、白

刄の裏表を手燭にてとつくり眺めて、疑もなき日吉丸といはるゝ形も申さうやうなし。文蔵を取寄せて辭世を認め、扇面を上使に渡し自身で辭世を吟じ、目を閉ぢ腹の邊を撫づるまで、充分に落附きて覺悟極めし有樣、いかにもよし。これと一所に時の鐘を打切ると道寄になる。長尾が太刀を振かざす。南無阿彌陀佛と靜に念佛を唱へながら、向を見込み、最早手筈が整ひしかとの腹を刺かするところ不思議〳〵。長尾が切下す白刄を引外して、左手にてうの利腕を押へ、右手を懷より出しかけ、右の足を前に蹈出し、糸を引いて着込の網襦袢を見せ、今ぞ成就のとの白ある。上使がやあと驚くと、右の片肌を脱き、右手に腹切刀を取上げて淺山の咽元へ打付け、うの手にて日吉丸を奪取りて立上り、長尾を一太刀あびせ、兩足を開きて身を屈め、手燭に照して白刄を眺入る。この間に安田は鎧出立にて花道より駈來るといふ取合せ、御兩人の映りいかにもよく、息もつけぬ程にあつたり。待兼ねた、安田作兵衛の白ありて、兩肌脱になり、右の足にて三方を蹈碎き、例の網襦袢の拵にて、日吉丸を右の肩に擔ぎてぐつと大睨をやらるゝところ、九代目市川團十郎を代表すべき大歌舞伎にて、たまつたものにあらず。さて軍の駈引を聞き、妻の白を耳にもかけず、馬引けつと大音に呼はり、血刀を安田に拭はせ乍ら、御兩人引張の幕切まで大極上々吉なり。この役はいふまでもなく名代の鼻高の幸四郎丈や、親御の海老藏丈などの當藝と聞きたるが、それにも讓るまいと思はるゝほどの出來なり。市藏丈の作兵衛役。こゝらが本役にて上下出立も鎧拵もこの上なく映り、乾何にしろ緊要の切髪の件が持切れなかつたは致方なし。女寅丈の皐月役。亭主が好過ぎたせいもあらうが、北山楓狩の場。團十郎丈の曾呂利役。著附の好面白く、人物も曾呂利然として、面の名を聞かれて聞違へをいひ、うこが曾呂利流でござるとのとぼけ加減をかしく、新七つ面の中、最初の邯鄲にて、しなやかなる足取手振を見せ、次の頼政にて、きぱ〳〵とはでなところを見せ、殺生石を新藏丈に代らする間に衣裳を着け、奏の上にて凄味の乘地も申さうところなく、面を取替へて被せられしを知らずに、羽衣の面で羅生門の鬼を舞ひ、鬼の面で羽衣の優しい振をする可笑味大受にて、とゞ惣踊まで大御苦勞であつたり。新藏、猿之助、染五郎の諸丈。いづれも一粒ぢりのとことんやなれど、親玉の後ゆゑ見榮せざりしは、いかにもれ氣の毒の次第なり。（明治二十六年十一月二十二日）

初春の喜きに何ぞ書いて見たく、硯には向ひながら、別に趣向もあらねば、昨年中大歌舞伎よりも緞帳の方が芝居をするから遙に面白うござると、いつも肩臂を張し位、隨分小芝居の役者に知つた顔あるを幸、一番讀者の御案内旁

明治二十七年初芝居の豫評

といふものを、未だ誰もためさぬだけに、やつて見やうと思立ちぬ。

歌舞伎座は一番目の雪駄直し長五郎、中幕の廿四孝、大切の明烏とも、ある評者にいはせたら露の滴るほど結構なりと申すべき艶物揃なれば、眞の芝居好といふほどの芝居好は、我人とも に暮の内から、この十二日の蓋明を指折數へて待つて居るはいふまでもなし。菊五郎丈の長五郎。汚な細工の拵五分も透なく、源之丞を殿様ごがしにするあたり、主膳宅のことはもて、半次内のくだけ方など抜くるほど好かるべし。八重垣姫は御器用な事と申す丈にて、狐火を人形でゆかれ、人形遣に綺麗首を使はるゝなど政略といふべし。時次郎は白く塗らるゝだけで、れかやに謀反があるに相違なし。彌助丈の勝頼は二度目といひ、固より勝頼役者のことゆゑ、出たばかりで見物の女性を惱ます

刄の裏表を手燭にてとつくり眺めて、疑もなき日吉丸といはるゝ形も申さうやうなし。文書を取寄せて辭世を認め、扇面を上使に渡し自身で辭世を吟じ、目を閉ぢ腹の邊を撫づるまで、充分に落附きて覺悟極めし有樣、いかにもよし。これと一所に時の鐘を打切ると道寄になる。長尾が太刀を振かざす。南無阿彌陀佛と靜に念佛を唱へながら、向を見込み、最早手筈が整ひしかとの腹を利かするところ不思議〳〵。長尾が切下す白刄を引外して、左手にてうの利腕を押へ、右手を懷より出しかけ、右の足を前に蹈出し、糸を引いて着込の網襠袴を見せ、今ぞ成就のとの白ある。上使がやあと驚くと、右の片肌を脱き、右手に腹切刀を取上げて淺山の咽元へ打付け、うの手にて日吉丸を奪取りて立上り、長尾を一太刀あびせ、兩足を開きて身を屈め、手燭に照して白刄を眺入る。この間に安田は鎧出立にて花道より駈來るといふ取合せ、御兩人の映りいかにもよく、息もつけぬ程にてあつたり。待兼ねた、安田作兵衛の白ありて、兩肌脱になり、右の足にて三方を蹈碎き、例の網襠袴の拵にて、日吉丸を右の肩に擔ぎてぐつと大睨をやらるゝところ、九代目市川團十郎を代表すべき大歌舞伎にて、たまつたものにあらず。さて軍の駈引を聞き、妻の白を耳にもかけず、馬引けつと大音に呼はり、血刀を安田に拭はせ乍ら、御兩人引張の幕切まで大極上々吉なり。この役はいふまでもなく名代の鼻高の幸四郎丈や、親御の海老藏丈などの當藝と聞きたるが、それにも讓るまいと思はるゝほどの出來なり。市藏丈の作兵衛役。こゝらが本役にて上下出立も鎧拵もこの上なく映り、屹と强勇の兵と見ゆて、三役中一の出來なり。女寅丈の皐月役。亭主が好過ぎたせいもあらうが、何にしろ緊要の切場の件が持切れなかつたは致方なし。

北山楓狩の場。團十郎丈の曾呂利役。若附の好面白く、人物も曾呂利然として、面の名を聞かれて

間違へをいひ、うとが曾呂利流でござるとのとぼけ加減をかしく、新七つ面の中、最初の邯鄲にて、しなやかなる足取手振を見せ、次の賴政にて、きぱ〳〵とはでなところを見せ、殺生石を新藏丈に代らする間に衣裳を着け、裳の上にて凄味の乘地も申さうところなく、面を取替へて被せられしを知らずに、羽衣の面で羅生門の鬼を舞ひ、鬼の面で羽衣の優しい振をする可笑味大受にて、とゞ惣踊まで大御苦勞であつたり。新藏、猿之助、染五郎の諸丈。いづれも一粒ぢりのとことんやなれど、親玉の後ゆゑ見榮せざりしは、いかにもれ氣の毒の次第なり。（明治二十六年十一月二十二日）

初春の寄きに何ぞ書いて見たく、硯には向ひながら、別に趣向もあらねば、昨年中大歌舞伎よりも緞帳の方が芝居をするから遙に面白うござると、いつも肩臂を張し位、隨分小芝居の役者に知つた顔あるを幸、一番讀者の御案内旁

明治二十七年初芝居の豫評

といふものを、未だ誰もためさぬだけに、やつて見やうと思立ちぬ。

歌舞伎座は一番目の雪駄直し長五郎、中幕の廿四孝、大切の明烏とも、ある評者にいはせたら露の薄るほど結構なりと申すべき艶物揃なれば、眞の芝居好といふほどの芝居好は、我人とも に暮の内から、この十二日の盞明を指折數へて待つて居るはいふまでもなし。菊五郎丈の長五郎。汚な細工の拵五分も透なく、源之丞を殿樣ごがしにするあたり、主膳宅のこはもて、半次内のくだけ方など抜くるほど好かるべし。八重垣姫は御器用な事と申す丈にて、狐火を人形でゆかれ、人形遣に綺麗首を使はるゝなど政略といふべし。時次郎は白く塗らるゝだけで、にかやに謀反があるに相違なし。福助丈の勝賴は二度目といひ、固より勝賴役者のことゆゑ、出たばかりで見物の女性を惱ます

はまたじも、浦里の仇つぼきにはいかなきまじめやをも浮き立たすべし。松助丈のれ虎ばゝあ、半次もも若もなくやつてのけられ、市藏丈の主膳は品が乏しいかもしれねど、山名屋亭主は憎味たつぷりならん。秀調丈のれ丝は容姿二の町なれど、湯衣は大結構なるべし。菊之助丈の源之丞。少し若すぎるかもしれねど、粂三郎丈のれとよには好き對なるべし。家橘丈、訥升丈の更科、原は花形楠にて勇ましかるべし。

明治座は伊達騷動の實錄のよし。筋を知らねば好惡はいへねど、固よりぐらう人の細工にうつのあらう筈もなく、先代萩といふ狂言のあるのに、わざ〳〵實錄を持出されし程のものゆゑ、左團次丈の落着いたところ、小團次丈のねばついたところ、蓉三郎丈のもがついたところ、さては米藏丈のきばついたところに欲つた箇處定めて多かるべければ、新粂ずきの竹の屋主人は、定めて朝日新聞の十日位を費つぶして、例のめでたし〳〵をきめらるべし。序に權十郎丈の小十郎は人品欲り、秀調丈の淺岡は皮肉なことなるべし。大切の石橋、これ又目を驚かず大立派は今より思ひやらる。

春木座の一番目楠正成にては八百藏丈の正成、附髭鎧下の大澁好みにて、辯說滔々と勤王論を唱ふるなるべく、中幕の瀧夜叉は福助丈のれ目見にゆゑ、白綾の振袖を引抜いて、金糸の網襦袢になり、小長刀でもかい込んで六方をふつて這入らるゝか、但し引張の見によろしくかはらしぬが、なにもろ薄やか〳〵といふ株ならん。大切に松之助丈のれ光、田舍娘には仇すぎはせずや。雀右衛門丈の久作、ある劇通を恐れ入らすること受合なり。

新市村座の忠臣藏の裏表にて、九藏丈の由良之助に勘平、兎も角も手替りといふだけのことはあるゆゑ、松王や藤次に敬服した手合は、こゝが好劇家の喜ぶところでがあせうと顎を撫でゝ、隨分面白くないところも我慢するに相違なし。しかし由良之助が惣髮になつたり、勘平が頬髯を生やしたりする底の活歴史は、れ爲を存じて留め申す。納子丈、芝鶴丈とも、役々を敷でこなさるゝところ當世なり。瀧十郎丈、勇賞丈までも、この座にいれば身分不相應の賞贊を被ること間々あるは、三河屋の人望大層なものなり。

常盤座の一番目の紀文大盡に雛助丈の紀文、梅暦の藤さん位には見ゆるならん。中幕源氏礎の多見丸丈の忠信、車輪といふことが技藝の妙ならば、この丈は名優に相違なし。

三崎座の一番目弓張月に福圓丈の爲朝、醫者に見立てさせなば、この爲朝には神經系の病ありて、時々筋の痙攣を起し、放心することありといふべし。圓升丈の紀平治、機敷のれ客が死んだ女房八代に似て居るので、御曹司はどうでもよいといふ風情あるべし。二番目黑手組の助六に家太郎丈の新左衛門、團三郎丈の助六、どちらもつゝこんでよゞして居れど、惜いことには二人とも小柄にて見立があるまじ。其答丈の揚卷は五厘のこぶ卷といふ惡落がきて、猿枝丈の新兵衛、舊惡のある親父のやうに見にはせずや。

新盛座の一番目酒井の太皷に歌女太郎丈の忠次、惡い出し物なり。此丈にはどこまでも片倉小十郎がついて廻はつて、少しも泥醉して居らぬところが、大酒量の證據とでも迹を張るかしらぬが、兎に角二錢團洲を思ひ出すが落より。幸藏丈の鳥居。氣組だけは微なり。二番目神明の喧嘩に幸藏丈の辰五郎。常盤座で一度出された上、持前の勇肌にて、師匠うつしの小手の利いた仕打大出來に相違なく、悔三郎丈の女房との別は、御兩人にてたつぷり泣かせらるゝに極まつたり。この次には菅

原でも出して幸藏丈の相張、松王、歌女太郎丈の覺壽、源藏でも見せられたいものなり。

眞砂座は嵯峨の怪猫にて福圓丈の化猫、こゝらが本役にて、足も達者手も達者なところ頗はれ、最負師者は大受なるべし。中幕のれ三輪。自分のすることだけ手つとり早く片付くるは、日の短い時には德用なり。馬十丈の鯰七、獅童丈のれむらなど、手覺白のことゆゑ危なけなかるべし。

柳盛座の一番目夜討曾我に和光丈の五郎、大堀越信仰のことゆゑ、勿論火事見舞の拵にて、剃入の荒つぽきことなし、敢皮の述懷など點のうちどころなかるべし。梅雀丈の十郎。時候柄風邪の氣味ゆゑん。中幕に梅雀丈の六歌仙、達者やのとことんなれば、兎に角倦はこぬ筈なり。二番目の お國六三はい仲藏丈と吉三郎丈との兩花形にでれ〳〵させて見するのが呼物の一つなれば、下町の娘子はいづれも大悅なるべし。

吾妻座は一番目鳥追お松、中幕盛綱陣屋、大切淨瑠璃にての女優一座。鶴枝丈の梅干を含んだやうな顏附は少々恐れ入れど、錦糸丈の三好屋然とした否味なき藝風は男優を凌ぐ値ありて、時代世話ともれ手の物なれば、芝居好は必ず見てやるがよし。

藍染座は忠臣藏にて、桃十郎丈の由良之助。播磨屋が熱に浮かされたやうな藝風なれば、由良之助定めて肩を振つて歩くべし。

新聲館の人形芝居は千本櫻の通しにて、播磨丈の館屋は例の喉で唄はるゝだけならんが、淨瑠璃丈と綾瀬丈との川連館は、いかにも折合ひてずつしりするなるべし。（明治二十七年一月七日）

春木座の初興行一番目　嗚呼忠臣楠柯夢

きゝふ名題丈では、何れも八百藏丈の楠公に氣焰を吐かする御趣向かと思ひしに、繪本の摸樣ではさうでもなく、藤房の諫言やら、義貞の出陣やらありて、れきけに大詰の瀧の場は作り阿房の楠明王丸が本心を顯すといふ筋もやらでいかさま幸堂氏のいはれし如く、先代の新七氏が書卸されし記念の海老胴を開き樣を趣向と見ゆ。（役者商賣往來）何んでも棟割長屋の安普請同樣、手あたり次第に拾つて來て離きやくると云ふが、この節の流行ものなるべし。見た人の話に、駒之助丈の義貞が富士郎丈の勾當の局に別を惜みながら花道まで行きかけ、いやたいやだとだゝをこねて後へもどり、又馬にひきづられての引込は古今獨歩の滑稽にてありしよし、見落したるは初春早々の不覺なりき。それに反して芝雀丈の明王丸はいかにもよくとして居たりとのこと、兼ねて目星をつけしわれ等は何より滿足なり。（中幕）

瀧夜叉

は勝藤藏氏が福助丈のれ目見えに書卸したるものゝよしなれど、同丈に瀧夜叉と唐衣との早替りをさするのと、燒討の火事の方に計氣を入れて、肝心の同丈が演て見せやうといふ餘慶なきは殘念。つまり例の活歷史かぶれで役者に正本の素讀をさする丈故、一向に面白くなく、女子供までも愚痴たらたらなり。これよりか在來の瀧夜叉でもよければ、歌舞伎座の向を張つて、先年壽座で當てられた八重垣姫でも出された方遙によかりしならん。筑波明神の場にて、廟の中より聲かけての出、下げ髮に白綾の襲着、胸に鏡をかけたる拵、目の覺むるやうなれど、生贄の首とゝのひ、陰の太刀の手に入り心を苦びて、皆萬歳を諷へよやとの幕切、錦繪を正で見るといふだけのことなり。光國と八郎との仕合を止めて、光國を味方につくるところ、將門の息女といふ威嚴はれ持前にて慥かなり。

唐衣に代りて、の襟柳姿は、又立優りてうつくしきため、夫にあひてのなつかしさより耳打のところ、少しく色模様に見ゆしは是非もなし。薄紅梅の着附にて貴にあふところ中將姫ほどの面白味もなく、疲れとみてつまらず。燒酎の場の姫も、氣を入れて居られたれど、火事の騒ぎに紛れて、何が何やらわからざりしは殘念なり。八百藏丈の大宅の光國。古館の場。惣髪に載附じんべいの拵へにての出、花道の逃懐は釣合の悪い白もあれど、現に角きつぱりして氣持よく、古御所の様端に腰打かけて女盗の振を見る間の形もよく、こゝ丈は芝居らしくて嬉しかつたり。八郎と仕合をなし、神文を認むるまで申分なし。案内せられて歩むうちも四邊に心を配る工合抜目なく、唐衣との出会、空井戸樣の出会は腰をかけたはる幕切まで、役だけのことは充分になされたり。早拵にて二役老女岩崎。更作も箭りよく、妻味も相應にありて申し分なし。駒之助丈の隅田八郎。例のとんきやうにて、これを赤腕の老熟せば危い話なり。これに白の尻をやたらに引張るのが相變らず耳立ちたり。勘五郎丈の侍女。明けまゝせもかちよびはやつぱりちよびなり。宗三郎丈の侍女。悪味の中に可笑味を交ぜしは不恰好の體附もある形にてよし。雀右衛門丈の武藏五郎。燒酎の場で何か言はるれど一向に解説ず。晩夜叉の弁舌を聞て、幕切の見え、義理にも賞められず。銀之助丈の女盗。一番見てくれ者いふ振事自に付きたり。二番目れ染久松妹背門松。野崎村の場。見巾先より田舎娘には孔過ぎは せずまた家師に配せしが、按の定島田髷の羽が開き過ぎ、首を前に突出した個元意氣にすぎてゆど あれども水藍潜の肌合に見ゆるは不注意なり。髪も結うてれかうものといふあたりは流石色氣あり。れ染に當るところ炙を据うる可笑味のあたりも相應にざわついれど、尼になりてはりは、切髪が長め拵物品がまず目に後室樣とみて不受なり。雀右衛門丈の久作。こんなことはまゞ手に入つたもの

の迷ふなれど、小助をやりこむる田舎氣質も一通りといふまでにて、旨味といふものに乏しきは水の違ふ爲か。やいとのあつがり樣は、場受ありたれど、異見の場ですてゝことじみた手附をせらるゝは、隨分臭ひことなり。右田作丈の久松。容貌といひ、仕打といひ、宵越の蕎麥同樣のびきつて形なし。幕出は古今の不出來と云べし。芝雀丈のれ染。色氣が不足にて、少々人形芝居のれ染じみたれど、門口で長々と待たする間相應に芝居をして居しは感心。さはりになりてからも今一息の慨はあれど、此座に居ながら一向に臭味のつかぬところは何よりのことなり。(明治二十七年一月十七日)」

歌舞伎座の初興行十番目　夢結蝶鳥追

土[illegible]夢結蝶鳥追[illegible]は根が色つぽき話の上に默阿彌翁が例の艶筆にて書きこなされしものゆゑ、どこもかも色氣たちけで甘見て居ては面白けれど、小梅の小屋にてれ古代源之丞が同衾の始終を見するところ、日暮里の隱家にて為長が夫に蝮捕藥を飲ませ、とゝ引窓の紐にて縊り殺すところなどは、共に鄙猥に過ぎたれば削除すべし。小屋の場にてれ虎が源之丞より祝儀を貰ひ、れ難有うどざりまするとれ貰ひの樣にいふところ、長五郎が逢引をして居これで一うく揃つたといふものだといひ、居酒屋にてれ直しだよといはれてびつくりするところなどは、場當りとはいひ乍ら、その社會の風俗を穿ちたる才筆とゆふべき也。生膳の宅の場にて源之丞、喜六などが圍繞するところにて、主膳が長五郎の身持を悪くいひ流すかゝ非人といふのはどいひかけて心附き氣の毒がる樣子、一座も白けて他の事に紛らす。盥梅など、實際あり得べきことなれど、凡作者にては夢視することも出來まじ。源之丞が見染の幕切で長五郎が喜六の跡をつけての引込の道具替りも寸法が極つてよく、れ長が出刄をふりまはし

て半次の疑念を晴す件も珍らしからぬ事とはいひ乍ら、芝居にては新しき趣向なるべし。中幕

[illegible] 本朝廿四孝 [illegible]

謙信館庭先の場は、八重垣姫の顔を拵ふるつなぎだけのことにて、餘り難有くもなし。十種香と狐火とは香羽屋が姫の初役とありて、道具衣裝とも大張込にて見事なことなり。大切

[illegible] 明島春泡雪 [illegible]

は珍らしき出し物にて、柴藤太夫の出語り、梅吉の三味線色を添へて結構なれど、梅幸丈が時次郎とれはやさ三役を勤むるといふ道樂にて、部屋と貴場との間に廊下の場を加へ、女郎の上妻案やら結闘の茶番やら長々と見せられしは迷惑千萬にて、その爲に緊要の氣が抜けてしまふは隨分惡い思ひ付なり。[illegible]

菊之助丈。阿古木源之丞役。吾妻橋の場にて黒紋付の若流し挿み帶大小にて花道よりの出、男前上上にて見物を呻らせたり。雪駄の鼻緒の切れしを爪先に引かけながら下座の合方にて舞臺へくる中、少しも體の崩れぬは感心。長五郎との名告合もしつとりとこなされ、おこよの姿に目をつけてより、四邊を眺むる素振にて橋の方へ歩み乍ら、三足三足ゆきては後を振返る工合も目立たぬやうにして得心させられたり。欄干にもたれ乍らしつとれこよの後影を見送る姿もよく、梅が香やの白にて前へ歩み出で、はてあてやかなと見とれて居り、長五郎に袂を引かれて持つたる扇を落し、世話であつたといひながらやはり向ふを見込む幕切、いかにも大とりにとなされ、序幕はこの丈のこの役で持つて居りし位にて、大當り〳〵。小屋に忍ぶところは着附かはつて一倍男前よく、れこよの出合も色氣を充分もつて居ながらすつきりとこなされ、微塵厭味氣のないところ大受。主膳宅にて髮を撫付けさする件あつて、れこよが手を洗ひ居る後へ忍び足にゆきて、柱にもたれ乍ら立身にて寄添ふと、れこよも心附きて下から見上ぐるところは、洒落本の口繪にでもありさうな形なり。長五郎が猥藉を怒り刀に手をかくる條、例のつぶれた調子ゆゑ、自が急込みすぎ、惡落の來たはれ氣の毒なり。長尾景勝役。赤面の映りもよく、することもつゝこんでせられしは受けたり。人形遣は御苦勞。

菜三郎丈。おこよ役。序幕に烏追の拵は明治子のわれ等には珍らしくて受けたれど、顔を出されぬ位ゆゑ評するところもなし。小屋の場にて長五郎の歸りしあとにて上手の障子を明け、お虎と顔見合せてにつこりと笑を含む件、美しくてよし。庭口の場にて長五郎の相圖を聞きてお虎が立たうとすると、いきなり袂につかまつて離さぬところ、處女の情合にて受けたり。やたらにはにかむで煙草盆や茶碗を置いてはつひと離るゝところも態とらしくなくてよし。父に向ひて、ほんに父樣大明神樣といふ白は、世話場には釣合惡しきやうなれば、拔いた方がよかるべし。この丈の振袖役も大分度重なりし爲か、段々役に身の這入つて來たは結構なことなり。主膳宅にて丸髷の奥樣風は一しほよく映り、菊之助丈源之丞との色摸樣よかつた〳〵。人形遣は御苦勞。

松助丈。小屋ものお虎役。序幕に烏追の姿にて三味線を抱へての出、帶の間にれ捻りの紙をいくつか挿んで居られしは受けたり。小屋の場にて長五郎が昨日の殿樣に賴まれてれ前に用があつて來たといふを聞いて、れやまあ嬉しいねねと急に色身になるところどつと場受はありたれど、後にも同じ筋があるゆゑ、どちらか拔きたし。うの話なら大承知だと受合ひて長五郎を歸すまで、師匠と二人の出合ゆゑ譯もなく面白し。れこよと顔見合せ、れこよさんうゝ嬉しからうねえといひ、又今晩

はお樂だねねといふ白、したゝるく色氣ある言廻しにてよし。庭口にて待遠がつて立つたり居たりする件より、長五郎を迎へに出て源之丞と顔見合せれちけて後へ下る工合も自然にて、煙草盆にかち〳〵はいらないかねといひ、今夜はれ初會だからといひ、又小判を貰ひて、れ難有うござりまするといふ可笑味など、作者の趣向を活かしてよし。長五郎が氣休めをいふを眞に受け、傍によつて突倒され、後をれつかけて這入るにも口取の折を忘れぬところ大屋の鰹なみにて面白し。この場は若い二人でばつの惡いといふ筋のところを、師匠の長五郎がちよびなのとこの丈のれ虎のがちや〳〵したのとで面白く浮かせて見せられたり。小手柄半次役。居酒屋の場。遊び人の旅形申し分なく、長五郎の頼を受込むところさしたることなけれど、釣錢をとりて、百だとよといふ幕切は利いたり。石藥師前の殺しは、劍術も何も知らぬといふ腹で、一寸切つては一寸石の蔭にかくるゝといふ仕打、場受ありたり。手傳つて仕舞つて川に突込まるゝは隨分惡い役なり。日暮里の場。川より上つて、どこかで借着をしたといふ風にて何か素肌に引かけ、足駄をはいて出てくるところ見すぼらしく、長五郎の煙草入の落してありしを取上げて、有樣にいつて仕舞へとれ長に逼る間もむきに怒らずに、不機嫌の體にて腹を探る工合よし。れ長が出刄を出して殺して呉れといふに、うんな手に乘るものかと振向きもせぬところ、遊び人の性根にてよし。とゞ刄物を突立てんとする覺悟を見屆けて初めて押留め、れれが惡かつたとあやまつて來るのび加減大出來なり。鼠捕藥を飲ませられて悶き廻り、細引で首を絞めらるゝまで、どうしても埋らぬ役廻りなり。長尾謙信役。品をよくしやうとの考か、頬髯をつけられたれど、大時代の白廻しは今一を息据りが惡く、何だか御當人も氣のないやうに見ね、れ間に合せの形あり。

市藏丈。梶井主膳役。序幕に浪人の賣卜者にて、番頭を手打にすると威して小五郎より百兩の金をゆすり、尙喧嘩の仲裁をする振にて貸金の證文を卷上ぐるずぶとい仕打、例の手强いところに欲りて出來たり。宅の場は急に出世したといふ筋より、撫付假髮、黑紋付羽織に袴といふ拵ゆゑ、人品も相應し、一癖あり氣にてよし。喜六に向ひては應柄に、お古代源之丞に向ひては鄭重に會釋をなし、お古代がいつもかうして居りますといふを聞きて、どうござりませうやらと笑ひ乍らいふあたりもよし。兎角非人といふものはといひかけて紛らすところ、伯圓丈の講釋ではこんな人物ではなければど、この筋では據なし。長五郎のこはもてにびくともせず、灸所を押へてぎうといはする手並、中々大舞臺にこなされたり。石藥師の場にて石を投付けられての殺され方は目新し。齋藤道三役。顏の作りも白髮假髮の映りもよく、調子のよいため押手が利き、形のきまりも申し分なく、この前の頓兵衛などより荷が輕いだけに大出來なり。山名屋四郎兵衛はれ持前の役柄とて、何もせず巨燵にあたり乍ら貴を見て居るだけにて、憎味充分にこたへたり。

秀調丈。熊坂れ長役。日暮里隱家の場。遊び人の姉御といふ拵申分なく、子分に肩を揉ませて居る形、中々仇つぽくてよし。三次のゆすりをあしらつて居る度胸のよいところも解りたり。長五郎がずぶ濡で來たのに着物を着替へさせ、酒盛をし乍らむだをいつてゐる間も、少しも遠慮のなき工合、情人あつかひの腹見ねて受けたり。亭主の歸り來しに驚き、慌てゝ長五郎を揚板の下へ忍ばせ、そこら中を片づけながら、生欠伸をして、今目の覺めた振をして戸を開くるところ功者なり。半次が長五郎の煙草入を出して問詰むるに、はつと思ひ乍らぎつくりなぎをせず、濟まして志らをきるところ滅法よし。言譯を聞かぬゆゑ、出刄をもつて來て殺して呉れといふ落附加減も身上に欲りて受けたり。疑

の晴れしを見て、酒徳利の中へ鼠捕薬を入れ、これこんなにあるよと振つて見せ乍ら、中の薬をよく混ぜるといふは御工風なり。夫が悶くを見て、人にもちつとは利くと見ゐるといふところの凄味も相應にて、殺しより繩にかゝるまで、按外よくして居られたれど、調子が例の通りすいてしまふので、どうも緊要の白が生ぬるく聞ゐ、正銘江戸子のたんかにゆかぬゆゑ、凄味もそれ丈薄く覺ゐたり。濡衣役。後世に型を殘さうといふ意氣組とやら聞きしが、さてうれ程でもなし。わたしや輪廻に迷うたさうなといふ詞もあるゆゑ、この役は水々として、色氣のある方がよき樣に思はる。この丈のは顔立寂しく、先年市村座で見たる松之助丈のに劣れり。記念さへぢやにといふ文句ありて血のつきし白衣を持出すは、やはり烏籠の俤なれど、汚細工にて嬉しからず。御許されてと伏沈むといふ件にて經机の前に泣伏すところは好し。諏訪法性のといひかけて四邊を見廻し、うれが盗んで貰ひたいを、れ取出しが願ひたいといひ、取持の件にて後向になり廊下に立ちて四邊に目を配るなど、大分手替りをやられたれど、うの割にわれ等は受けず。

女寅丈。新造重里役。有形とて評判よし。

家橘丈。更科六郎役。男前と着附とのよい上、先に出らるゝだけ見栄ありて得なり。窓の者役も貰役にて綺麗なれど、立廻りの二度ありしは過ぎたり。人形の足拍子は御苦勞。

鶴升丈。原小文治役。着附の引立悪く、泉水の都合で二度目に出られしため見劣りして損なり。それに例のれ歯黒口をやらるゝのが目について悪し。新造浦波役も不の字なのはれ氣の毒。この次には小手を利かする役をつけて貰ふがよし。

福芝丈。歌女之丞丈が改名して名題に上られしはめでたし。娘れてる役。ちと無理な役廻りゆゑ中位なり。山名屋女房役。體は欲りたれど、異見のところの白が時代すぎて、輕くゆかぬは殘念。

染五郎丈。山崎屋小五郎役。師匠を張つて輕くするつもりかと見ゆれど、體がぐにやつくだけで不受なり。

兒福丈。調子がべたつきに聞ゐて閉口なり。この丈の調子が耳立つため、師匠のまで氣になつてくるは困つたものなり。

蟹十郎丈。小屋頭喜六役。小屋頭の人柄に相應して、長五郎を殘してはづすところ、諧を歌ひ乍らの出も申分なし。長五郎に逢つて娘は身投をしたと、實しやかに話して居て、底に作り事といふ腹を利かする中々むつかしい場を、充分得心のゆくやうにして見せられしは感服。下男が持つて來た着を間違だと叱り附け、うれなら返してくるといふと、なにとつてれくがよいと紛らすところ、上上の出來なり。主膳宅にて身分を顧みての仕打も屆いたり。堀井理左衛門役。これも妙に欲りてよし。

瓶太郎丈。番頭權九郎役。いつも替らぬ手代敵なれど、いつも替らず面白し。幇間辨孝役。八重垣姫のれ茶番は旨いものなり。

菊四郎丈。小使勘太役。看籠を持つて來て、注文が違うたといはれ、呆れて押問答する鹽梅、長五郎が吊詞をいふのが飲込めず、顔ばかりじろ〳〵見て居る工合、うのまゝの山出しにて大出來。山名屋の若い者も體にありてよし。

菊三郎丈。井太夫役は臭し。幇間も中位なり。猿藏丈。三原傳三役。一と通り。菅五郎丈。鵜つかひ役は一と通り。居酒屋亭主は出來たり。屠藏丈。山名屋下男役。こんなものはいつも乍らよし。升

藏丈。甞聞にて狐火の義太夫は下手なのが賣物か。丑之助丈。禿みどり役。さしたることなし。福助丈。武田勝頼役。豫評にも申しゝ如く、勝頼に生れついたかと思ふやうな人なれば、彼此いふに及ばず。三優中第一に欲り役と見受けたり。昔の勝頼はもつと色氣があるといふた人があるやに聞きしが、さほど色氣が入用でもなきゆゑ、うこちは榮耀の申し分なるべし。浦里役。湯上りの姿にて下手よりの出、黒縮緬裾ぼかしのしかけ、鼈甲の一本ざしの映りいかにもよく、解けぬ思に浦里はといふ文句につれて、部屋の前に立留り、ほつと息をせらるゝだけにて、愁の利く人ゆゑ、苦勞に窶れた樣子見ゐ、思はずほろりと致したり。三途の川もこれこの樣に手をとつてと口說の愁顔などふるひつくほど好く、見物の魂をかきむしられたり。責の場はさしたることなし。春木座では唐衣で責められ、こゝでは浦里で責められ、とう〳〵御病氣とは困つたもの。中幕と大詰とはこの丈で半分かついで居るといつてもよい位なれば、どうか一日も早く御全快のほど願はし。

菊五郎丈。雪駄直し長五郎役。橋詰に店を出して仕事をして居る拵萬端、生窟しにて申す所なし。駒下駄の直しを持つて往きて歸り、小さなたはしでそこらに水を撒いて又仕事にかゝり、源之丞が緒の切れし雪踏をとり、裏の泥を落し、鼻緒のところをしめすなどの小細工受けたり。冠り物をとつて昔語になるところの極りよく、仕事をし乍らお虎と話をして居る間もむだなし。お雪駄が出來ましたといひても源之丞が心附かぬに呆るゝ可笑味面白く、とゞ袂を引いて大きくいひ、源之丞が落す扇を拾つて泥をはたき乍ら不審の思入にて幕は、御兩人〳〵と申すべし。小屋の場。小さつぱりした着附にて、滅法樣子がよく、手拭に包んだ年玉を出すところ、氣が利いたものなり。お虎に見染る事を話す間も、松助丈と御兩人ゆゑ愛嬌たつぷりにて、草履をはき遠へて、へゝ愁にかまけて目も何も晦んじまつたといひ乍ら急ぎ足の引込まで透なし。ぶら提灯を提げて源之丞を案内し乍らの出、花道にて首尾は大極上々吉といひて、容貌をよく生れるのは一制穩でござります、ねへゝゝゝと額に手をやつて反かへつての空笑ひくるほどよし。家は汚なくつても、綺麗なものが居りまするとれこよに指さすところ、れ虎の立ちし迹で、あれで亭主があるから可笑いぢやありませんかといふところ、源之丞の紙入から金を出して包むところ、れ虎と二人になり、れめねに亭主がないとなあと持たせかくるところ、たゞ口合をいひて坐を持つだけなれど、うのちよび加減にいへぬ旨味ありて難有し。兎角鳥と明の鐘は惡まれ者でござりますの幕切も手輕いものなり。裏田市の場。道具の籠をかつぎ舊い笠を被りたる形そのまゝにて、喜六に出合ひ、れこよが身投の話を聞き、とんだ取持をして濟まなかつたと後悔して涙に呉るゝところは、良心を顯した筋を腹に入れてのこなし振極めて好し。下男の持ちし肴籠に目をつくるところも透なく、喜六の遺した手紙を見て、さては一杯くつたかと息込む顔立凄いほど好く、狸親父の化の皮、ひんむいたりの上で、どうか元手にといひかけて四邊を見廻し、氣を替へて笠を被り、でにい〳〵と流しながら迹をつけての引込、無類飛切の妙なり。主膳の玄關にかゝり、雪駄を直すといひて籠を卸し、喜六の脱いで置いた雪駄をとり上げ、くすべ鼻緒云々の白ありて雪駄をたゝきつけ、息込み乍ら手甲をほどく道具廻りもよかつたり。庭口の場。下手に立聞をして居り、よき程に頬被のまゝつか〳〵と椽端近くにゆきてしやがみてをり、主膳がどこから來たといふに、れれは小屋から來たのだと手拭をとつて肩にかくるところ受けたり。喜六の胸づくしをとつてこづき廻し、吾妻橋からどんぶりと、とんだところへ身を投げたなとれこよにかけていひ、三千石の御知行も、もし殿樣、棒にふらにやあなりますめねと源之丞にあ

たるやうにいふところ、手酷く應へてよし。源之丞が刀に手をかくるを見て、さあ切られやうとあぐらもかゝずに椽端に腰をかくる見くびつた仕打もよし。主膳の口を利くを鼻で笑つて、わつちは非人だが今のあまやこゝに居るちゝいは何だといふところ、只任せろ〳〵ぢやあ任されねゑといふところ、こけが將棊をさすやうに待てとは何んだといふところ、金をやらうといはれ、こいつはちつと話せるはねと舊に返るところいづれも小氣味よし。石藥師の出合を約束して下手にかゝり、いつそ主膳をばらしてといふ腹を利かするところもあつさりにて得心したり。居酒屋の場。半次の合羽をひつかけて一杯飲みながら、後でお直しだよといはれ、びつくりして飛びのくところ安くして、笑はせられたり。殺し場は石を倒しかけたり、亀の子のやうに出たり引込んだり、少しちやりすぎはしたれど、兎に角面白し。半次を川に蹴込み、どうで今夜は濡れにやならねゑの幕切も申す所なし。日暮里の場ずぶ濡で來て、半次の着物を着せて貰つたり、あんかをこはして股火をしたり、情人がつて我儘三味をするところ、何か拾白をいつての小酒盛もあつさりにて止められしは御注意なり。半次の歸りしに揚板の下に隠れ、お長が半次を縊るところにて、板をはね揚げて半身を出し、片肌ぬいで細引の片端を引張る見得は、幸四郎の錦絵にでもありさうな形であつたり。召捕はさしたることなし。八重垣姫役。まづ道具の好み、いつもなら障子一重の上手に姫が住ふを、渡殿を隔てたる居間にしたるは尤なれど、同じ羽色の鳥翼といふ文句ありとて、泉水に鳥籠をしつらひしは物數奇といふまでにて、さほど感服もできず。文句の中添臥のを妹と脊のと改め、れまへの姿をあなたの姿と改め、勤する身はいざ知らずといふ文句を除いたるを見識とすれば、なぜ結髪ばかりにて枕かはさぬ妹脊中といふ文句をうのまゝに置きしか聞かまほし。容貌は極念入の厚化粧の上、骨折つて可愛らしい顔をせらるゝゆゑ、いかにも美しく、これが雪駄直しをした人とは見ねず。振は今迄の型に新案を加味せられしと見ね、行き屆いたることなし方なれば、兎角申すは勿體なき程なれど、所謂榮耀に餅の皮をいへば、小手が利きすぐるためか、深窓に生長ちし姫君といふ風に乏しく、調子も凄味になり勝にて、どうかするとおつかぶせの喰せものではなきやと思はるゝだけなり。人形身は風姿よりも動作を示すものゆゑ、一舉一動節にかなひて、いかにも輕妙にでき、容貌も着附の爲か前より立優りて見ね、惣體に香場より狐火の方大出來なり。此役については世間で彼此申すものもあらんかなれど、色惡專賣の梅幸丈が八重垣姫をこれ程にこなされしは大手柄といひても差支なかるべし。時次郎役。男前若々として、愁に沈みし樣子一しほよく、浦里と色つぽい口說、露のたるやうであつたり。おかや役。好んで出されたほどのことなく、これ程ならこの役を松助丈に譲つて、切まで時次郎を見せて貰ひたかりき。(明治二十七年二月六日)

春木座の出し物は

伊賀越道中双六、一谷嫩軍記、三千兩駿河土産、女鳴神

なれど、大和橋は菊之助丈病氣の爲見物の當日は出幕にならず。又一番目の序幕は見落したり。二幕目本田家邸の場。駒之助丈の内記役。仕合の所にて何か烈しく言切つてさつ〳〵との引つ込、けたたましきことなり。政右衛門を成敗せんとての出に、烏指の持つ鵜竿のやうな長い鎗を持つて出られしはどういふ思召にや。政右衛門に鎗を押へられて離れぬとの思入は仰山に過ぎて下品なり。すべてこの仕合の手は戯らくして論にかゝらず。幕切行くを呼留めて、早うかへれよと輕くいひ、氣を變へてゆけ〳〵といふところ、ほろりとさする筈なれど、此丈はつんと濟まして兩手を袂に入れ

たやつを前で重ねて本の座に戻るといふ仕打ですつかりこはしたり。勘五郎丈の櫻井林左衛門役。仕合に勝つて暇を貰ひたりとて、花道にかゝつてから何か惡體をついての引込、惡味が足らぬやうに思はれたり。雀右衛門丈の政右衛門役。仕合の場にて内記が引込みし迹にて述懐めいた言廻ししんみりとゆかず。下手へ這入らるゝところ、袴の裾が後へぴんとはね反つて居る樣子から例の體を振つての歩き方堪つたものでなし。役者なら體の風情といふことを少しは考へるがよし。廣間の場にて花道から早足に出て、捕方を投げつけてつか〳〵と舞臺にくるところ、坂地の人の喜ぶところか。鎗の尖を喉に當てがはれて濟まして居る工合は、洋行がへりの天一も跣足といふ見ぐなり。花道に殘りてしほ〳〵としての引込に、拜領の刀を右手に捧げ加み勝に歩まれしは、どうも見榮のせぬ仕方なり。芝雀丈の志津馬役。著附も相應し、氣組もありてよし。沼津の場。八百藏丈の重兵衛役。手拭で頭を卷き、合羽をはふつたる旅拵の映りよく、平作がたつて荷を持ちたいといふに據なく持たするところも、輕口をいひ乍ら歩む間もさら〳〵としてよし。只根からの町人と見ぐず、侍の上りの樣に見ゆるだけが申分なり。れ米の後姿を立上つて見送るところ風情あり。家のことをきゝさして平作を後にのこし、先へさつ〳〵と這入つてゆくところも可笑味ありたり。平作家にて荷持が無理に引立てゝ往かうとする故せうことなしに立かゝりながら、娘に引かされてとつれいつする樣子も可笑く、とゞ腹が痛んで來たといふところ大受なり。このあたりは色氣があつても厭味になつてはならぬところゆゑ、この丈のさつぱりした藝風に衿りて至極よかつたり。盗人は娘と見て、腹立つ聲のふるふところも自然にてよし。背語を聞いてさては現在の親かと驚き、名告つてしまはうかとの思入とゞいたり。門口を出掛りてれ米が差出す笠を取りながら、親父どんもとる年ゆゑと外ながら親の事を頼むところ、利かせ場だけになされたり。花道にかゝりながら雨にならねばよいがといひての引込も申ずところなし。松原の場。後より呼ばるゝゆゑ提灯を吹消し、早足に逃げやうとの仕打も尤なり。平作との問答も例の名調子ゆゑ、平作がれ前樣は御發明といふ詞に適ひていかにもよく、うれにうるみ聲での言廻しゆゑ一しほ應へたり。名題の又五郎の在所をいふところから親子の名告合までたつぷりと泣かせられたり。松之助丈のれ袖役。素と廓に居たといふ筋がこの丈の體に衿りてよし。重兵衛を大切にするところ、どこまでも親父の世話になりし禮といふ心にて、少しも色つぽき樣子のなきは流石なり。重兵衛が女房に貰ひたいといふに腹を立て、早ういなして下されと父をせがむところ、いかにもよし。印籠を取りにかゝり、押へられて面目ないとの仕草も一通りなり。我身の瀬川に身を投げてといふさはりの件にて懐手をして胸を突出し、ちよと太夫のことなしになるところ受けたり。父を焦立てゝ出すところから立聞をしての愁歎も申し分なし。雀右衛門丈の平作役。日に燒けた顔の作りから、目の周圍のたどれたやうな塗り方、汚な細工の拵まで申し分なし。無理に荷をかつがせて貰ひ、二足三足かついでは肩をかへて息をつぎ、冗談をして間をのばす、例のやとまかせのところ、調子から足取まで大出來にて、政右衛門をした役者と同人とは見ぐず。流石この丈も地藝はある人と感心せり。足の爪をはがして做大に聲を立つるところ、それでは荷を持たせてあげませうかとの可笑味、自分の家を重兵衛に敎ふる輕口から、且那樣はれ早いことぢやと息杖を後に廻し兩手で押へての引込まで上々にこなされたり。家にかへりてれ米をまだるがつて籍でうこち中はたき廻すところから、濡紙を被つて寢るまでも申分なし。盗人ときゝて飛起きてうろつき廻り、灯をつけて見て娘と知り、びつくりし、重兵衛が息込むに手を合せてこれでござ

りますとあやまり、娘を引据ゑて涙乍ら異見するところ、見せ場だけありて際なく出來たり。われではいかぬと重兵衛の跡を追うての引込も氣組充分にてよし。こけつ轉びつ重兵衛に追ひすがり、敵の在所を無理に聞かうとする老人氣質もよく映り、脇差を突立てゝ息をつめて居る間も、あれ聞いたか娘といひかくる件も申分なし。親子の名告をして落入るまで、この役は當込氣なくつゝこんでせられ、珍らしく臭味を出されず、この丈と舞臺にて近附になりし以來の出來なり。近年坂東太郎丈吾妻座にてこの役を演じ、大に新聞社の劇評者を驚歎せしめしことありしが、(尤も伊賀越は暫く大歌舞伎で出ぬゆゑ、初めて見た人多き爲もあつたらうし、太郎丈のよろぼひ加減、丁度平作の年齢ゆゑ、自然眞に逼りたる爲もあるべし)こん度の雀右衛門丈の平作もさしたる甲乙なき樣に思はる。唯太郎丈は今一と息老込んで衰れつぼく見にたれど、理窟をいふ工合から腹切の工合は今度位にてよきかと思はる。宗三郎丈の荷持役。使に引返すところにて花道にかゝり、目印を賴み升よといひての引返も輕く、平作の家にて茶を出した娘に目をつけてもう一杯頂きたいといひ、親父が次に汲んで出すを見て顔を蹙めて茶をこぼすところも可笑味ありてよし。重兵衛を無理に引立てゝ往かんとして叱らるゝところ、腹が痛むといふに驚き、不審ながら花道にかゝり、初めて娘に氣があると感づき、勝手にしをれといひてかけ込むまで、つゝこんでよし。勘五郎丈の孫八役。こんな役は男前もよく、氣も利いて結構なり。總じてこの幕は役々の欲りよく、まづ近年の沼津と思はれたれば、芝居好は必ず一見してれくがよし。さて迹は一口評にて御免を被るべし。岡崎の場。八百藏丈の幸兵衛役。體が武張つて居り、する事も手丈夫にて、大事の人質何故殺したとの突込み方、唐木政右衛門、和田志津馬、不思議の對面、さゞ滿足であらうといふところの貫目も、この座組には相應せり。梅太郎丈のれ谷役。車輪にやられたれど除り禁ぢず。雀右衛門丈の政右衛門役。政右衛門といふ人物でなし。志津馬と出合のところ做大に過ぎたり。芝雀丈の志津馬役。前幕同樣の上評なり。七蒔助丈の幸兵衛妻役。役者になつて居らず。中幕に芝猿丈の熊谷役。老體に似ず、いつも若々と大派手大立派なるは不思議。只足の惡いのを見て涙が溢るゝ計。福助丈の義經役。大御馳走。總て澁がらぬ處よし。駒之助丈の彌陀六役。頭巾附髭の工合、頓兵衛か關兵衛と間違へたものと思はる。頼朝を助けずんばとの白は改良〳〵。梅太郎の相撲役。無難。藤藏丈の藤の方役。身持りの首を見ながら、未だ小太郎と知らぬ中から泣いてかゝるは異なもの。大切福助丈の女鳴神役。紫縮緬の法衣に金襴の袈裟を纏ひたる姿、釋迦八相の悉達太子を女にして生で見るやうなり。一度は絶間之助を疑ひて屹となり、又疑を晴して口説になり、盃事ありて醉の廻る風情、隨分色つぼく出來たり。松之助丈の絶間之助役。若衆姿鬼闘けて見に、振も見事にせられて、代り役とは見にぬ出來なり。芝翫丈の佐久間信盛役。青竹を持つて押戻しの荒事、無類飛切の立派さにて、近頃になき大芝居なり。この幕は小文字太夫の出語、和楓丈の大薩摩色を添へて、善盡し美盡したる出し物なり。(明治廿七年五月四日)

市村座の一番目

新門辰巳小金井

序幕薩埵峠茶店の場。芝翫丈の新門辰五郎役。大分燒の廻つた親分の樣にも見ゆれど、例の愛敬にてどうにか見て居られたり。菊五郎丈の小金井小次郎役。假髮の恰好から足拵の樣子まで行屆いたものなり。茶店の澁團扇を使ひ乍ら往きかけ、氣が附いて亭主に返すは何でもなきことながら面白

し。芝鶴丈の青山新十郎役。拵はあんなものとしたところで、調子が時代がかつて受にくし。榮三郎丈の妻れさみ役。乳呑兒をかゝへてのやつれ姿よくせられたり。二幕目小金井喧嘩の場。同返し政次郎住家の場。松助丈の一の宮政次郎役。小金井方の一子分と見にたり。深手を負ひてとても助からぬと覺悟し乍ら、女房には大丈夫だといひて出しやり、迹にて親分に遺言をして別を惜むといふ仕悪い役柄を充分に得心のゆくやうになされたるは大感服。捕方が向ふといふしらせを聞きとりつめてきて落入るところも旨いものなり。松之助丈の政次女房役。長脇差の女房の腹にて重傷を負ひし夫を勵ますといふ心持も解り、醫者を送り出すとき、ぬき足をして醫者の側にゆき容體を聞く仕打も、尤にて受けたり。市藏丈の伊勢原鄕右衛門役。賭場防ぎの浪人物といふ役柄欲りたり。菊五郎丈の小次郎役。喧嘩場も氣組充分にてよし。政次家にて、親分子分の別はしつくりしたものにて泣かせられたり。政次を勵すところで、手めにしつかりして呉れなくちやあいけねにといふところは力に思ふ氣組見に、政次が落入りしを見て女房が嘆くを、もう仕方がねに、あきらめてしまへときつぱりいひ切るところ大丈夫の性根見にてよし。芝鶴丈の兄寅之助役。別に評のしやうもなし。蟹十郎丈の醫者は出來よし。三幕目木更津湊屋、小次郎寓居の場。市藏丈の目あかし玉吉役。れ闌にはねられし口惜紛れに盃洗に酒をついで無理強をする悪つ振手に入つたものなり。福助丈のれ闌役。男嫌といふはこの丈の體に欲り、殊に茶屋を出して居たといへば素人娘といふ解でもないゆゑ、度胸を据ゑて飲めぬ酒を意地で飲むといふところ大出來なり。よろ〳〵し乍ら酔やあしないよと我慢をいふところもよし。亀吉の胸を聞いて得心する所も、この役はこの丈に限るやう見受けたり。松助丈の明神前新兵衛役。朴訥なる老人を寫されてよし。娘の生酔を氣遣ふ仕打も屆いたり。猿之助丈の新宿の吉五郎役。魚屋から近頃一人前の男になつたといふところ見に、弟の首を持つて親分に詫ぶるせつない役を氣を入れてせられしは好し。菊三郎丈の弟五郎吉役。玉吉に釣りこまれて親分の名前を泄し、その詫に自分の首を兄貴に切つて貰ふといふ役柄、突込んでせられてよし。家橘丈のれ角役。前後の分別なき小娘の痴情に逼りたる仕打あんなものなるべし。菊四郎丈の八軒屋榮次役。小次郎を打たんと忍び込み、くら闇にて切かけ乍ら返り打になるところ、すきなくせられたり。此兩丈は今度名題に上られしが、れ闌丈の値は慥かに有り。菊五郎丈の小次郎役。亀吉と變名して居り、れ闌を慰むるところ、男前上々なり。新兵衛に起され派手な浴衣姿にて蚊蚋より出づると灯が消にて居る故、探り足に門口へ往かうとする、榮次は長物を振かぶつて一打にしやうと切りかくる、うれをあちこち外すところ、見るも危ないやうにて、とゞ返り討にして戸を開け、新兵衛が刄物を見て腰を抜かすまで、三人共大出來〳〵と申すべし。四幕目府中宿本陣の場。芝鶴丈の青山新十郎役。大屑な貴役なれど、宿屋の駒澤か何かを張つて居るやうに見受け、一向この役は腹に逼入らぬものらしくて評にかゝらず。蟹十郎丈の星野伴平役。役だけの事は慥にして居たり。菊五郎丈の小次郎役。鴨鶴籠の富藏といふ面影も見にたれど、する事は悪びれずして好し。其外の評は略す。五幕目佃島の場。こゝはいよ〳〵四千兩の牢内といふ趣見にたり。菊五郎丈の小次郎役。役附の富藏と同じ樣なれど、する事にうつはなく、火事場の消防も威勢の好きことなり。芝鶴丈の辰五郎役。この場は一層よぼくれて見にしこと氣の毒なり。猿之助丈の鹿沼の糸吉役。可笑味の身上話間抜けてよし。囚人は三階總出にて銘々こつて作られたれど一々は評せず。片市、蟹十郎の兩丈の拵、中にも目につきたり。中幕

實錄先代萩

福助丈の淺岡役。堀越の重の井といふ格にてこなされたれど、今一と息堪能せぬところあり。菊五郎丈の片倉小十郎役。拵を凝り過ぎた爲か、分別臭くて感服せず。福祿丈の龜千代役。闘子のよき子役なり。丑之助丈の千代松役。痒いところへ手の屆いた仕打振にて、梅舍、梅幸兩丈を後に瞠若たらしむる趣あり。淨瑠璃

鈴音眞似操

松助丈の寢臺老人の人形。眼附の凄いところも欲り好く、少しとぼけた工合もよし。家橘丈の椅子藝の人形。小柄の恰好よく人形に欲り、下目遣をして頭を細く振る工合などゝのまゝに眞似られて大切中の出來と見とめたり。鈴踊りの人形。さしたることなし。猿之助及外兩丈の一寸法師の人形。出來たり。丑之助丈のほてる少女の人形。これもよし。福芝榮三郎兩丈の婦人の人形。頰の紅の附方が濃過ぎし上、形が充分につかぬものと見ゆ、中出來なり。芝翫丈の警官役。慢に振のある人だけこの役はいかにも樂にでき、寢臺へ乘つてすますところ大出來なり。菊五郎丈の足長の人形。この前も「キャリネ」を摸してわれ等を驚したる器用者の大將ほどありて、麥酒を飲む可笑味の中に手輕な振事は、外に類なき面白さなり。寢臺道化師の人形。寢臺の持上がるを不審がるところより、一旦反とばされて次に仰向に寢るときびく〳〵しては起上るところなど受けたり。骸骨は未だ見ぬゆゑ評なし。兎に角舞臺の飾附より道具の捲上がる工合などゝの儘に寫されたるは大凝のことなれど、「キャリネ」のとき程に受けぬは、役者の體を人形に比ぶるとどうしても寸法が延び過ぎて居るためなるべし。(明治廿七年七月)

市村座一番目

霜夜鐘十字辻筮

は、二世河竹新七が俳優六人に好みの役柄を投票させて、これを二番目物に仕組みしものにて、三題噺といふものがあるからには、まづ六題噺とでもいふべきものなり。されば題は兎に角聯絡がついて居れどその聯絡が誠に薄弱にて六通りの人物が思ひ〳〵に運動して居る所は、やゝ廻り燈籠の形あり。それでも歌舞伎新報に正本仕立で載せられしときは實に讀んで面白かりき。これはその筈、何々當時の流行を穿つて、五分も透かないといふ風に出來て居れり。殊に文情兼至といふ所は車坂町の場にて、巡査が少女を惠む一段なり。少女お竹が私と一所に學校に居た者が、今頃は日本略史を讀で居り升といふ抔は、課業に熱心なるをよく寫したるものにて、又巡査薫が角燈を見せてそこに一厘錢が落ちて居るといふ所も、實に巡査の保護といふ題に協つた趣向なり。又楠公の奇計といふ難題を型を撮ることに使ひたるなど、日本にてはまづ新意匠といふべし。讀んで此程面白いから皮に掛けたちさぐと思ひし割には、最初の時も冬にず、只役者の敏腕と愛敬とで持つて居たりき。これを十五年經つた今日、何の手入もなく舞臺に出しては、穿ちも多分は時代後れになり、因緣を聞かねば難有味もあるまじと思はる。中

源平布引瀧

九郎助住家の場は齋藤實盛が源家の落胤を見逃すといふ筋なれば、實盛は大居捌けた男の樣なれど、よく考へて見れば平家の祿を貪ひ乍ら、如何樣の義理ある迚、源氏に心を通はす二股侍、武士の風上にも置けぬ奴なり。れまけに加賀國篠原で打たるゝ抔と、二十年先の事を豫言するは可笑し。之

に比ぶれば瀬尾は餘程忠義者なれど、うれも鬼の目に涙で、大事な使に立ちしを打忘れ、我子の恩愛に引かされて變心し、縱令自滅すればとて孫を源氏のお役に立てゝ下されなどといふたはいなさ、情義めおやくしなり。併しまた言つてはゝ丸で三馬の偏癡氣論なれば、こゝは一番九藏がとつてれきの實盛に、市藏の瀬尾、仲藏の九郎助といふ名物揃として、古風の劇評をなすべし。

八百藏の六浦正三郎は適役なり。奥山の場で眼病のこなし申分なく、見すぼらしき中に士族氣質のもあるあり。安泊にて薄命の述懷もあつさりにて應へたり。宗十郎はどうかすると時代臭くなる弊があつて困りしが、此人はそれがなくてよし。工役梅石齋にて最初の出に、圓十郎は八反の綿入羽織で將も生さぬ爲、演說家とは思はれぬといふ評のあつた所なるが、此人は黑紋付の羽織で八字髯を生されてよし。豐三郎と立身で話をする時、兩手を帶に當てゝ一寸演說師の形を見するは趣向なり。梅公の拵も申分なし。猿之助の杉田熹は貴役ゆゑ中々の喝采を受けた樣なるが、此役は鞠五郎が周到なる仕打を固有の愛敬とで一代を動かした程の當り物なれば隨分がつたり溜がした樣なり。猿之助も愛敬はあれど、まだ藝に旨味といふものが充分出て來ぬ故是非なし。市藏の按摩宗庵は伸藏が獨占の大當を取りし役なれば、さしづめ松助に持つて行くべきものが此人に廻つたもの故、何となく目的が外れた樣な氣がしたり。別に惡い所はなけれど、此人がすると頃から强く且惡黨らしいから、初めは哀れに見せてぐつと氣の變るといふ凄味に乏しきが申分なり。されば三枚櫓は知らず、安泊の場はやはりあつけなはれど、奥山下の場で金助とのつかみ合はやす面白かりき。納子の鼠岐金助は。車坂の場の拵人物共、まづあんなものとしても、歩振や體のこなしが誰かを氣取つて居る樣に見に當鼻持ならず、れ村を口說く白廻しも時代過ぎて不都合なり。根岸のゆすりはやゝ地金の

納子になり、歸り掛に暴れ乍ら喜美太夫の煙草入を抜くところはやゝよし。兎に角こんな藝風では大歌舞伎に上すべき人物に非ずといふも差支なし。榮三郎のれ村は素と流れの身で今は堅氣な奥樣になつたといふ處見にてよし。下寺跡の場で池から上つて泥塗れにて氣絶して居る樣子よく、巡査の外套を着せられた形もよく、車に乘せられてからも疲勞の心持で居る工合受けたり。兎に角美觀無雙の半四郎の後でこれ程にやらるゝは手柄なり。富十郎のれ豐は哀れさ持前にあり。小傳次のお竹は役が本當に腹に這入らぬと見に、菊之助が見物の涙を絞りし俤だにあらず。菊三郎の稻田豐三郎、兒福のれ兼、共に普通なり。壓十郎の泥藏はよし。扇藏の喜美太夫は言語同斷にて、評すべき限りにあらず。二役れ熊は鶴藏の役なりしが、まづよし。梅助の丹作は梅五郎（今の松助）の後なるが、まだ此人は輕い所には往かず。瀧十郎の楠下男佐兵衛は例の通り。あやめの楠下女れしゴは好し。九藏の齋藤實盛役。拵はやはり白地錦の樣なはつきりしたものにして貴ひたかりき。押出しは若々として立派なり。小松殿の內命を言渡す白廻し、眼遣ひやゝ仰山なれど、此人の藝風ではあんなものならんか。瀧尾とちり〳〵の詰合はなか〳〵活氣ありてよし。物語の間にちよく〳〵世話に碎くる樣なるは、あらずもがなと思はる。小萬を呼生くるとき九郎助を井戸にやつて呼ばする代りに小萬の耳元に自身口を寄せ、白旗を奪ひ取られなといふは好き思附なり。產氣づいたりと聞きての喜び、太郎吉を叱つては白旗の前に行つて禮拜するあたりは、此人では一向面白くも可笑くもなし。御男子といふを押ふる可笑味を除かれたるも右等の解か。太郎吉をあやし乍らの仕草も愛敬に乏しき人ゆゑ面白味なかりき。仁惣太を切る幕切は流石に締まつて見にたり。市藏の瀧尾兼氏役。拵仕草とも型通りにて清盛公の御諚意であとといふ所も手强くてよく、實盛との詰合も見劣なく、扇子で腕を

動かして見る仕草も安けれど好し。胸に思案がなくちや協はぬとの苦笑もよし。小萬の死骸を蹴飛し乍ら憂を含みての言廻しも出來たり。松助の九郎助役。始終仲滅寫しと思はれ常時類のなき九郎助なり。初め鉢卷をして肌を脱いで實盛に詰寄り、後に氣がついて鉢卷を取り肌を納めて樣子を聞かせて下されといふ處大に好し。女貧の小萬役。御苦勞。英太郎の太郎吉役。活氣ありてよし。然し白がのりになる所今一と息と見受けたり。蟹十郎の老漁役。よし。兒福の英御前役。勢がよすぎた樣なり。扇藏の仁惣太役。近頃見た菊四郎には遠く及ばず。(明治廿八年九月廿三日)

月草 終

明治二十九年十二月十九日印刷
同　年十二月二十二日發行

つき草奥付
實價金壹圓廿錢

著者　東京市日本橋區通四丁目五番地　森林太郎

發行者　東京市日本橋區兜町二番地　和田篤太郎

印刷者　東京市日本橋區通四丁目五番地　星野謂治郎

發行所　春陽堂　電話五拾壹番

印刷所　東京市日本橋區兜町二番地　東京印刷株式會社　電話浪花二百〇五番

版權所有

内に著作者
の印税を納め
刷れば偽書

美奈和集

鷗外漁史著
郵税共定價十六錢

うたかたの記の哀れなる、舞姫の優し氣なる、文使の面白き、戰僧のうら悲しき、偖は盜俠行の勇ましきなど、小說韻文脚本雜錄、柳櫻をとき交せて三十九章、悉くこれ漁史が八斗の才を一管の筆にそゝぎたるもの、「つきくさ」「かげぐさ」と共に、文壇三美の稱あるもの

かげぐさ

鷗外漁史
新著近刊

本書は「つき草」の好對として双美双玉の名あるものにして鷗外漁史が多年間の執筆にかゝるものの所載の小說脚本數種は獨國魯國の傑作佳什を飜譯にして其文學者逸話及傳記の如き英獨佛露の作家を氏が靈筆を振つて宛然生けるが如くに描き出したる千有餘頁の大冊子なり苟しくも文學に志あるものゝ一讀せざるべからざるの珍書なり

74
36

084776−000−6

74−36

月草

森鴎外／著

M29
DBA−0121